
五剣神 ～女神～

ユユリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五剣神 ～女神～

【Nコード】

N1043X

【作者名】

ユユリ

【あらすじ】

この世には、二つの世界がある。一つは、普通の平凡な世界。もう一つは、力がすべての世界。この二つの世界を行き来するには、女神の絶対なる力が必要だった。平凡な平和そのモノの世界で悪を働こうとする力の世界の者Ⅱ闇人。彼らを取り締まっているのは女神の安全を守る五剣神。

五剣神は、今日も戦いに明け暮れ、女神の思いつきに振り回されるのであるはずだった・・・。

ある戦いをキツカケに女神が、行方不明に・・・

必死に行方を追っている中、女神はいつもの通りに（へーへ）
女神の自由な物語の始まりです。

はじまりはいつも 一火炎一（前書き）

なんか、訳の分からない文章で ごめんなさい・・・；
文章力（？）が無いので。でも、アレコレ勝手に考えるのは大好き
です！

ヘタの横好きですが、暇つぶしにもならないモノですが、テキトウ
に見てくれると うれしいです。どうか、長い目で見てくれれば幸
いです。

そして、最後に一つ！

こちらで、書いていると、よく友達に「○○の話に似ている！」っ
て言われてしまいますが、一応すべてオリジナルのつもりです。何
か、変なところがありましたら 遠慮なく言ってくれて構いません。
出来る限り、早く直します。

はじまりはいつも 一火炎一

「玄武がこんなところ指定してくるからいけないのよっ！」
もうっ！と、ほをふくらませている朱雀こと赤鳥ネムは、足元に転がっていた小石を蹴飛ばした。

ここは、新島港。過去は、とても盛んに漁業が行われていた場所らしいが、今は面影もないほど、あれきっている。

そんな港に ネムと小波は来ていた。玄武と呼ばれてきたというのが、その玄武は どこにも見当たらなかった。

「なんなのよ、あいつは！こんな 薄汚いところに呼んどいて・
もう、30分以上も待たしてんじゃないわよ!!」

ネムの怒りのボルテージは 秒を刻むごとに増していく。

「あー、もう、遅ー遅ーい!!」

・・・さっきからこの繰り返し。小波は 携帯を取り出し、画面を見る。

「あ・・・電波無い。」

小波が呟いたのが、聞こえたらしいネムは 自分も 携帯を見るとすぐにしまった。

「もう いいわ。帰りましょ、小波。」

そういうと、さっさと歩き出してしまう。

「え？ いいんですかあ？」

「いいわよ。これ以上待つ義理なんてないわ。ヒマだったから来てあげれば これだもの。麒麟様の言う通り無視すれば よかった。せっかく この私が 来てあげたって言うのに！」

『私』を 強くいう。こういう時のネムは 本気で怒っている時のネムだ。何も言わずに素直に言う事を聞いていたほうが身のためで

ある。

「呼んどいて来ないなんて・・・ただの嫌がらせね。女神の小波がきてたのに。ふざけんなって感じよ」

ああ、帰ったら 玄武はこってり絞られてしまうのだろう。ネムの後に続きながら、半分ネムに同情し、もう半分 ネムに絞られる玄武に同情した小波であった。

この港は 周囲を高い塀におおわれている。唯一の出入り口から一歩外に出ようと 足を踏み出そうとした瞬間 「危ない！」 とネムに後ろへ引き戻されてしまった。

「え？ な、何？」

「結界よ」

ネムはてきとうに石ころを手にとると、出口に向かって投げた。石ころは 何かに跳ね返られたかのように バぁンツと言って こちら側に落ちてきた。灰色のような色合いをしていた石ころは真っ黒に焦げたような色になっていた。

「誰よ！ 何してくれてんのよ！？」

ネムが叫ぶと、高い塀の上から地面へと一つの影が落ちた。

「あなた・・・?!」

「フン、外には出せねえぜ。」

オレンジの短い髪と腰に巻いたひもの様なモノを きれいに風になびかせている少年が 塀の上に座っていた。少年は 意地悪ぽそうに笑うと、右腕に炎をともした。

「そう・・・、あなた、私を誰だか 知ってて言ってるんでしょうね？」

「五剣神の朱雀 だろ？」

「死ぬ覚悟は 出来ているようね。」

「死ぬのは てめえだ。クソ鳥が！」

少年が、右腕の炎を勢いよく飛ばす。ネムは簡単によけると、一歩下がり、小波に言う。

「小波、邪魔だからどこか行って」

「ね、ネム・・・知ってる人？」

「火炎の奴よ、多分・・・さ、早くどこか行って。燃やすわよ」

背中に寒気を感じた小波は、ネムの言う通り、さっきまで居たところに向かって走り出した。

「ハッ！男が尻尾巻いて逃げてんじゃねよ！」

「あんたの、安っぽい挑発になんて乗らないわよ！どうせ、戦いの経験の少ない小波だと、すぐに負けてつまらないでしょうから、特別に私が、相手してあげる。喜びなさい」

「ウゼッ。お前らは、俺に勝てねのによ」

牙をむき出す火炎と、激しく威嚇する朱雀の睨み合いは、そう長くは続かなかった・・・。

はじまりはいつも 一火炎一（後書き）

んゝ、何これ？ です。書いてるわたしからしても。
ちゃんと、続くのか心配です。

頑張っ書こうとは思っているのですが、不定期投稿です。

少年VS朱雀

牙をむき出す火炎と 激しく威嚇する朱雀の睨み合いは、そう長くは続かなかった・・・。

少年は腕に灯した炎をより強く燃やすと、ネムに向けて火の玉Ⅱ炎玉を放つ。

炎玉は、ものすごいスピードでネムに向かうが、またよけられてしまう。

ネムはすぐにしゃがみこむと、

「フン！」

力む。真っ赤な炎が円状に広がると、少年に向けて 炎の鳥が数匹飛び出す。

少年は火の鳥に向けて炎玉を飛ばすと、塀から飛び降りて背後に回る。

「あなた、やっぱり火炎の者ね。火山みたい。」

「あいつと、一緒にするな。俺は、火舞の火龍だ。」

「火舞の・・・火龍・・・」

「忘れたとは、言わせねえよ？」

少年の腕から落ちた炎の塊は、コンクリートを溶かした。

「あら？ 熱いわね」

「ただの炎じゃねえ、俺のはマグマが噴き出す炎だ。」

「フン、火舞は、火山と一緒にナンボでしょ？」

「だから・・・」

火龍は、腕の炎から剣を実体化させると切り込んできた。

「一緒にするんじゃない？！」

後ろにきれいにバクテンをしたネムは、ぐるっと180度回転する

と、火の鳥を飛ばす。火の鳥は、火龍の腹にぶつかったが、ジュっと言って消えてしまった。

「俺に炎はきかねえ！」

火龍は剣を切り込む。ネムの右頬をかすめる。

「ちっ・・・いちいちメンドクサイ」

舌打ちをすると、ネムは空に向かって左手を高く上げた。

「来なさい！朱雀！！」

左手に大きな炎の玉が出来る、一気に燃え広がった。

「あぶッね・・・！」

火龍は数歩下がる。

ネムを中心とした円状の炎は、大きな玉から渦へ・・・鳥の姿へと変わった。

『ギイイイイイー！！！！！！』

炎をまとった朱雀Ⅱ大きな鳥は、高らかに鳴き声を上げた。

ネムは、朱雀の背中に飛び乗った。朱雀は、空高く飛び上がる。

「逃げてんじゃねーよ！」

火龍が下から叫ぶ。剣に力をためているのが、頭上にいるネムにも分かった。

「さて・・・どうやって倒そうかしら。これも、時間稼ぎにしかないわ。同じ炎同士、中和し打ち消し合ってしまうから、そんなにダメージはないし・・・小波は使えないし・・・」

『ギイイー！！』

「キャッ」

急に朱雀がスピードを上げて、空を飛び始める。

「ちょ！？な、何？」

ボオオオオオー！！

目の前に炎の柱がたった。朱雀は360度回転すると、炎の柱をよける。

「あいつ・・・こんな高さまで・・・」

炎の柱の正体は、火龍だ。力強く炎を噴射させている。

「・・・！？」

だが、下にいるはずの火龍の姿はそこには無かった。

「あいつ・・・どこから？！」

目の前にまた、炎の柱がたつ。そこには・・・黒い影がぼやけていて・・・

ボオツオオ

炎の割れる音がした。

少年VS朱雀（後書き）

2話。2話目です。

自分的には、もう 頑張ったって気持です。2話目だけだというのに・・・

これから あと少し火龍書いて、朱雀書いて、小波書いて・・・書けるか分かんないけど、一火炎ー 終わらそう（＾０＾）

朱雀と空

目の前にまた、炎の柱がたつ。そこには・・・黒い影がぼやけていて・・・

ボオツオオ

炎の割れる音がした。

「~~~~っ!」

炎の割れる音と共に爆風が上から下へとふきつけてきた。地面にぶつかった暴風は威力が衰えることなく回りを吹き飛ばす。

その風に体重の軽い小波は 飛ばされそうになった。

『ギイイイー!』

上で起こっている戦いを小波は遠目でしか知ることができない。

でも、今見える中で一つだけはつきりと分かるものがある。

朱雀が急降下してくる事だ。ただ下りてくるにしては、スピードが出過ぎていると小波は思う。

それに、下りてくるであろう場所は予測するに小波が今いるところなのだ。

「・・・・・・っ!」

やっと今の状態を理解できた小波はあわてて他の安全な場所に移動しようとして走り出した。

別にこの戦いに加戦しないわけではない。やろうと思えば小波にもできる事なのだ。女神の力を持つ小波は この世界で絶対的な権力を持っている。だけど、この世界がまともでないのは、この世界に生きる全ての者が 自己主張のデカイやつらと自信家ばかりで構成されているからだ。

まとめれるのなら、小波の先祖がもうしているはず・・・
自信家ばかりだからこういう戦いが多いんだ、なんてため息をついた小波は後ろを振り返ろうとした時、周りが一気に炎に包まれた。

「ワッ?!」

炎に包まれると体が宙に浮かびグッと上へ持ち上げられる。体制を崩した小波は横に倒れてしまった。

「~~~~」

目を開けて体を起こすと、今まで見ていた地面は無く、空が永遠と見えていて下は・・・下は朱雀の炎。いつの間に朱雀に乗ったのだろうか、首をかしげながら後ろを振り返った小波。
後ろには当然のようにネムが立っていた。

「小波、今からあんたをココから逃がすわよ」

「・・・?なんで?」

「敵が多くなってきたからよ。空にいて分かったんだけど、遠くから敵の大群が来ているの。」

「そうなの?」

「そ!だから、火龍をやっつけてさっさと帰りたいんだけど無理みたいだからアンタを逃がすの」

「僕も戦うよ」

「は?うるさい、宮殿に戻ってこの事を麒麟様に伝えて援軍を頼んで。それまで時間稼ぎしとくから」

「~そうじゃなちゃダメ?」

「・・・今はあなたの気まぐれに付き合っているヒマはないの。一人じゃ無理っぽいから言ってるの!分かった?」

「・・・」

「お分かり?女神さま」

「うん。帰る・・・」

「じゃ、“空の果て”で逃げ切ってよ。朱雀をわたすから。回りを囲まれちゃっているみたいだし、そこが一番安全でしょ」

「麒麟に言いに行く！頑張ってネ、ネム！」

「・・・変な事考えないで真っ直ぐ行ってよ！」

じゃ、と 朱雀から飛び降りたネム。ネムは強いし五剣神の中で一番の自信家だから きっと大丈夫だろう。朱雀が強く羽ばたくとあつという間に 港から離れてしまった。

「ネムなら 大丈夫。麒麟が来れば平気♪平気♪」

空の果て・・・そこは空気が薄い場所であり、もう一つの世界へ通じる唯一の場所である所。

でも もう一つの世界に小波は行った事は無い。

この戦いだらけの世界では 珍しい少し臆病な女神さまなのだ。

自分の興味が湧かない限り 宮殿の外には一歩も出ないし、何もしない贅沢な女神。

じーと後ろばかりを見ていた小波は、上を見上げた。

太陽の向こうには もう一つの世界がある。自分の知らない世界が行ってみたいとは片手で数えるほどしか思ったことはないが、今はむしろに 見てみたいと思う。

届くはずがない空へ手を伸ばした時、太陽が強く光った気がした。

空には朱雀が飛んでいる。まるであわてているように何かを探すように同じ所を ずっとグルグル回っていたが、しばらくすると、真っ直ぐに宮殿へと飛んで行った。

・・・。
・・・。

朱雀と空（後書き）

かなり時間が空いてしまいました。

ええーと、10月は一年の中で一番忙しい時期です。アレコレやっ
て行くうちに いつの間にかこの小説を忘れてしまって・・・
久しぶりの投稿です。

玄武 宮殿にて

空には朱雀が飛んでいる。まるであわてているように何かを探すように同じ所を　ずっとグルグル回っていたが、しばらくすると、真っ直ぐに宮殿へと飛んで行った。

・
・
・
・
・
・
・

火龍と朱雀の戦いは、朱雀の勝ちで終わった。

火龍の敵の軍団も、五剣神援軍の前では歯が立たなかったという。また、この女神が実在する世界で五剣神の恐ろしさを現す事件が増えたのだった。

だが、ここに過去一度も起きた事のない事件が　女神の宮殿内で起こっていた。

「至急だ！ 大至急　情報を集めろ！！　いいか、分かっているだろうな。この事は外に絶対漏らすなよ！！」

「はっ！」

数人の隊長クラスの者が部屋から出て行った。

2人だけになった部屋で椅子に座っている白髪しろかみの少年がため息をついた。

その少年の斜め後ろで少年に背を向けて床でパズルを広げている茶髪の少年はニカニカ笑った。

「どうすんのよ？ 麒麟さんよ」

麒麟と呼ばれた白髪の少年は振り向く。

「だまれ、玄武。お前もさっさと行け」

玄武と呼ばれた茶髪の少年はパズルをやる手を止めない。

「やだね。・・・これ完成したら考えてやってもいいけどさ」

「ひっくり返されたいのか？」

「冗談じゃねえ！」

「こっちのセリフだ。分かっているのか？女神にもしもの事があつたらという事を？」

「十分！でも小波はそう簡単には死なねえよ。・・・簡単に泣くけど。」

「そこを考えなくては、いけないんだろ・・・もしも女神が死ぬような事があつたら・・・」

「知ってるって、この世の終わりだ。神がいなくなるんだからな。」
「・・・」

「この世の終わりが見たいだとか、なんだとか 変な奴はこの世に五万といけるけどさ、麒麟は心配しすぎじゃね？」

「・・・終わりは来ない。俺が女神を守る限り。・・・いいから、お前もさっさと行け！」

「おゝ怖！」

玄武はパズルの最後のピースをはめると立ち上がった。

「そんじゃま、行きますか。・・・おい、麒麟。そのパズル壊すなよ！後で額に入れんだから」

「・・・・・・・・。」

ボタンと麒麟1人を部屋に残して出て行った玄武。

「玄武様！我々はどうしましょ！！」

外で待ってました！と言わんばかりの元気な声を出したのは武装した少女。

「あー・・・アゲハ、情報収集頼む」

「はい！おまかせ！！我々が全力で玄武様のお役に立ちます！」
きれいな敬礼をしたアゲハは、スタタ・・・と走って行った。

「あー面倒事増えたな。」

歩き出した玄武は数歩進んだだけで振り返った。

まだ、あの部屋から麒麟は出てこない。

「・・・お前こそ動けよな」

再び歩き出す玄武。宮殿の外に出ると、大きな庭になっている。門の横には玄武愛用の剣を持って待っているアゲハがいた。

「よ！」

「玄武様、伝言してきました！わたくしは、玄武様に使えようと思いますす！！」

剣を渡しながらアゲハは きらきらした目で言う。

「あ・・・そう？頑張ってるネ」

「はい！！あちらに、馬を用意させてます。どうぞ
先を行くアゲハについていく。」

玄武は、立ち止まってもう一度振り向く。

（・・・一番怖がってるのはお前じゃねえのかよ、麒麟。）

「どうされましたー？」

「ん？なんでもね」

にこやかに玄武はまた アゲハの後に着いて行った。

（さて・・・ここから面白くなるか、つまらなくなるかの、分かれ目だな。女神に使える身だからこそその楽しみか・・・？）

玄武 宮殿にて（後書き）

次回から 女神Ⅱ小波です。

こっちの力の世界は、女神探しで あっちの平和な世界は女神の遊び場。

こっちと、あっちは今のところ つながり（通信）無しのもりで やって行きたいと思っています。

こっちでは、玄武君であっちは女神君で進行していききたいと思うので よろしく願います。

ちなみに、

・玄武Ⅱ健 裏でニヤニヤする事が好きな奴

・麒麟 女神の事を一番心配する奴

・朱雀Ⅱネム 女神を面倒と思っている奴

・アゲハ 玄武の直属の部下

・女神Ⅱ小波 付き合うのが少々めんどくさそうな奴

人物設定 今のところ決まっている奴らです。これから、あーおーと、増えると思います。

では、ありがとうございました。

力なき世界の住民と力の世界の女神

太陽の向こうには もう一つの世界がある。自分の知らない世界が行ってみたいとは片手で数えるほどしか思ったことはないが、今はむしろように 見てみたいと思う。

届くはずがない空へ手を伸ばした時、太陽が強く光った気がした。

「
•
•
•
h?
」

「あれ・・・？」

「.....」

太陽の光で思わず目をつぶってしまった小波。次に目を開いた時は、すでにそこは全く知らないところであった。

まだ近いところにあった空はとても遠く、朱雀の背中にいたはずが

今は雑草の生い茂る地面に座り込んでいた。
ドコからか遠くで 鳥たちは鳴き、川の子守唄は聞いた事もないほど荒々しく感じた。
気持が沈んでいくと同時に 空が曇りだす。
小波がいる森に 太陽の光が届かなくなると、まだ昼間だというのに薄暗くなる。
怖くなった小波は 光が見えるところへと走り出した。

「オイオイ・・・マジかよ」

道路わきに建つ一軒家の窓から顔を覗かしていた高校生ぐらいの少年が、空を眺めながらつぶやいた。

先ほどまで、洗濯物を干していてそれがやっと終わったところだった。

「あゝ休日にまとめて洗ったのが いけなかったかな・・・」
物干しざおには、沢山の衣服がかけられている。

「わん！」

「おわっ?!」

少年が窓を開けて外に出ようとした時、下から犬が吠えた。

「なんだ、ココか。脅かすなよな。」

少年は、足元にいるダックスフンドのココの頭を撫でた。

「わわん！」

「今度は、クロか・・・」

外からもう一匹の犬の鳴き声がする。小さい庭の奥、犬小屋とサクの間で雑種のクロが鳴いていた。

だが、いつものように少年に向かって吠えているわけではないようだ。

「ドコ見てんだ？あいつは・・・」

少年はさっさと洗濯物を片づけると 塀の裏へと回った。

「わわん!!」

「にゃあああ?! 犬うう!!」

「・・・?」

「あ・・・」

「うゝゝ犬うゝ・・・」

ココに飛びつかれて泣いているちびっ子君。

「ごめんな! 俺ん家の犬なんだ」

「犬うう・・・ぐすっ」

飛びついてるココを引き離して、ちびっ子君を泣きやませなければ・・・。

「ごめんな? 怖かっただろ」

「うう・・・馬鹿! ちゃんとコントロールしろっ! 言いつけるぞ・・・」

泣きながら言われても困ってしまう。

「悪かったって」

「・・・」

一応泣きやんだちびっ子君は辺りを見渡してから 真っ直ぐに少年を見た。

「一つ聞いていい?」

「ん? なんだ?」

「・・・ここ、どこ?」

「ここ? 静馬だけど・・・」

「シズマ？」

「見かけない顔だな、ドコから来たんだよ？」

「・・・カナメラ」

「・・・？か、カナメラ？」

「うん。シズマって僕知らない」

「俺もカナメラなんか知らないぞ」

「・・・」

「・・・」

なんか訳の分からない子供がいたものと、少年はため息をつきながら空を見上げた。

今にも雨が降り出しそうな・・・イヤ、もうポツポツ言いだした雨空。

きつとこのちびっ子君は、旅行かなんかで親に連れてこられた子だろうと少年は思った。

「ま、いいや。な、ドコの宿に泊まっているんだ？迷子だろ？連れて行ってやるよ」

「ヤド・・・」

「お前の泊っているところは　ドコだ？」

「泊る？何が・・・？」

「お前だよ」

「??」

・・・本気で分からないらしい。首をかしげてしまっている。

「じゃ、お前の名まえは？」

「女神・・・小波」

「女神・・・？聞いたことねえな」

そんな事を言っている間に　雨は少しずつ強くなってくる。

仕方がないから、ちびっ子君Ⅱ小波の手を引いて家に戻った。

その後、小波の親探しにでも行こうかと考えたが、窓の外は本格的

にザアーザアー言い始めたので止めた。

・・・っていうか、本当に意味の分からない子供であった、小波は。歳は7と小1で、住んでいるところはカナメラの宮殿、通称「女神の宮殿」。親は・・・いないらしい。その代わりに沢山の部下（？）らしい人がいると・・・。

どこかの王族とでも話している気分になんた。

「ね、ねってば！」

「あ？なに？」

「お兄ちゃんの名まえは何？なんて呼べばいいの？」

「あ、おれ？・・・そういえば言っとなかったな。俺は、さきがわのぶ佐木川信。ノブでいいよ」

「ノブ・・・？」

「ああ」

「ふーん」

もう興味がなくなったらしい。小波は テーブルの上に置いてあったカップを手にとった。

「あつっ！」

「よくかき混ぜて、息ふけよ」

「~~~~~」

「音たてて飲むな！」

「・・・」

信はソファに座り、小波はソファの下でミルクを飲んでいる。その2人の間に犬のココは座り、尻尾を振っていた。

力なき世界の住民と力の世界の女神（後書き）

新キャラ（？）

- ・佐木川信 なにかと面倒見のいい奴
- ・ココ ダックスフンド、人の後を追っかけるのが好き
- ・クロ 雑種、賢い犬

その他にいろいろと増えるか減るか・・・。

えーと、今の所はこんな感じにノンビリ行こうと思います。
ては、ありがとうございました。

静馬の町

信はソファに座り、小波はソファの下でミルクを飲んでいる。その2人の間に犬のココは座り、尻尾を振っていた。

アレからだいぶ時間がたった後、雨がやんだ夕焼け道。小波は、ココのリードを引きながら信の後について歩いていた。買い物のついでに小波の親を探すと、信は言っていた。その言葉通り、今は4件目の宿の受け付けにいる。

「そうすか・・・ありがとうございました」

話を終えてきた信が小波の所へ戻ってきた。

「ここにも、女神はいねーか・・・」

「女神探しているの？」

「当たり前だろ。お前の親・・・もしくは知り合いに会ってお前を引き渡さなくちゃいけないんだからな。」

「女神は僕だけだよ」

「・・・ま、知り合いの名まえはなんだ？」

「麒麟」

「・・・動物の？」

「ばかなこと言うな！」

「他は？」

「ほか？んー、玄武？朱雀？」

「・・・ふざけていないだろうな。なんだ？その何処かの神様のな

名前は」

「誰が、ふざけているの？ ノブ？」

「あのな、まじめに聞いているんだぞ？」

「……だって、シズマとか知らないもん」

「じゃ、どうやってここまで来たんだ？」

「知らない。気づいたらアノ森の中にいたんだもん」
「・・・どこのおとき話だ。」

はあくつてため息をつきながら信は立ち上がった。
そのまま歩きだしてしまう。

「どこ行くの？」

「商店街」

「しよ……シヨウテン、ガイ？」

「沢山店があるところだよ」

「黒市場みたいなの？」

「まゝ、市場みたいなもんかな。店いっぱいだし」

「ふん」

つまらない。

小波にとっては、見たことも聞いた事もないようなもののばかり言葉として出てくるが、それがなんなのか知ってしまうと　とたんに興味が薄れてしまう。

ちらっと、一番後ろを歩くココを見る。

（信は、獣の使い手なのだろうか？それに女神を探しているとは、反逆者なのか？でもそんな風には見えないし・・・それに、この町の者たちは皆おかしい。普通、街に出る時は剣や銃を隠し持つものだ。それが、ここでは一切出てこなければ火薬の匂いすらしてこない・・・）

そんな疑問を持ちながらも小波は黙って信の後についていった。
本当は、疑問が一つでもあればすぐに退却することと麒麟に教わっているから、さっさとこの場から離れたほうがいいのだろうが、この場所すら全く分からない小波はどこに逃げればいいのかすら、わかっていないのだ。

「ね、ノブ。ノブは何の能力持ってるの？」

「能力？」

「うん・・・」

「・・・能力ってあれか？漫画でよくある、あれ」

「あれ？」

「超能力みたいな、炎とか水とか操る人の事いう・・・」

「うん。ノブは獣？犬いるし」

「獣・・・俺にそういう能力的なモノがあるわけないだろ」

「・・・」

「お、ついた。」

桜商店街の中に信は入って行った。

「あら！信ちゃん、今日も来てくれたのー！」

「あ、おばさん。こんばんわ」

八百屋というところで信の足は止まる。

「野菜残ってる？」

「ええ、あるわよ！」

元気な声のおばさんと野菜を選びながら話している。

また、つまらなくなってしまった小波。

「わわん！」

「あら！こちゃんもきてたのね。お散歩？信ちゃん」

「ま、そんなとこで・・・」

「えらいわねー！家の息子も犬の散歩ぐらい行きなさいよってね」

「ノブ、つまんない」

「あ、ああ。もう帰るよ」

「ん？信ちゃん誰？その子」

「え・・・あ、預かってる子供です」

「へー、やっぱ信ちゃんは偉いわね」

「いや・・・その・・・あの、お金」

「あ、ありがとう。また来てね」

「はい・・・」

その後も同じような事の繰り返しでやっと、家に着いたのは6時であつた。

「おなか減った」

「わーってるって」

「何作るの？」

「カレー」

「辛いのきらい」

「じゃ食べるな」

「~~~~」

キッチンに入っていく信の後を小波は追いかけて行った。

暗闇の月

キッチンに入って行く信の後を小波は追いかけて行った。

「にゃ！痛い！」

「またかよ・・・」

「だってゝえ」

半ベソをかいている小波。片手に小さめの包丁を持って、さっきまで野菜を切っていたのだが、指を切ってしまったらしい。

「これで3回目だぞ。もうやめろよ」

「やっだゝあ。このナイフがいけないんだもん！使いにくいんだもん！僕のせいじゃないもん！」

「ホントはやった事無いんだろ？意地はってなくていいから・・・ほら、バンソーコ。ちゃんとつけてあっちでココと遊んでろ」

「ゝゝゝゝ」

「ほら」

「ノブのバカあ」

もらったバンソーコを指につけて小波は、ソファに寝転がった。

「ココのナイフやだ！嫌い！使いにくい！意地悪！！」

じたばたと足をばたつかせていると、ココが小波の背中の上へとジヤンプしてきた。

「わんわん！」

「~~~~~僕の上に乗るな〜!」

小波は体を回転させるとココを鷲掴みにして捕まえた。

「わん」

「お前が悪いんだ!」

「わわん!」

「うるさーい」

「お前がうるさい」

「~~~~~」

「わん」

抵抗してきたココを抑えつけようと小波は力を入れたが、信がポーンと頭を叩いたせいでココを逃がしてしまった。

「ノブのバカ!」

「バカバカ言うな。飯やらねーぞ」

「~~~~嫌い!」

「あんな・・・」

完全に不機嫌になった小波はココと信に背中を向けた。

ため息をついた信は何も言わずにキッチンへと戻って行ってしまった。信の後をココも追いかけて行ってしまふ。

・・・結局1人になってしまった小波は、窓の外を見た。

窓の外は 真っ暗で丸が少し欠けた月が出ていた。

窓に近づいてそっと触れてみる。窓は、少し冷たかった。

「麒麟・・・」

心配してるんだろうな・・・と、ため息をつく。

ガラスが少し曇っただけで キッチンから料理を作る音しか聞こえない。

こんなにも静かなのは なぜだろう？

小波の近くには必ずしも誰かがいた。振り向けば、無条件に必ず1人はそこにいたのに。

今は誰もいない。

いつも優しくて心配症の麒麟は今何をしているだろうか？

めんどくさがりの朱雀は 火龍とか言う奴との勝負はついたのだろうか？

常に後ろでスタンバっていた玄武は・・・もしかしたら、ここぞとばかり遊びに呆けているだろう。

考えたらキリがなくて 無償に寂しく感じた小波は、窓から部屋の中へと視線を変えた。

どうしてココまで静かなのだろうか・・・1日に1人は必ず死んでしまう世界だというのに。

「・・・？」

部屋を見渡していた小波は一つのあるものに目がとまった。

近づいてみると それは写真たてだった。でもその写真たては伏せられていて見ることはできなかった。手を伸ばしてみたが、背の低い小波には届かない。

「ノブノブ」

「うるさい」

「ブー」

信は使い物にならない。ココは・・・

よし、何か台になるモノを持ってこよう！

小波はテーブルの所にある椅子を持つと動かそうと力を入れる。

「・・・っ！」

・・・重い。なんで？力入れたのに。だったら、能力を使って！

「・・・っ！？重～～～イ！」

なんでなんで！！！？？

力も能力も通じない椅子って何？！

なんで こんなにも椅子は重たいのだろう。宮殿のは能力を使わずとも簡単に動かせたのに・・・。

「何やってんだ？小波」

信が皿をテーブルに置きながら小波に声をかけた。

「ノブ！椅子が重くって・・・ッ！？」

グラ・・・と、視界が揺れた気がした。・・・ホンの一瞬だけ。

「小波？」

「ノブ・・・？」

「こ、小波！？」

視界が揺れたと思ったら今度は一気に目の前が真っ暗になった。

どこか遠くで信が自分の名まえを呼んでいる事は薄れゆく意識の中ではつきりと分かっていたけど、それに答えるだけの力が小波にはなかった。

玄武とアゲハ

(さて・・・ここから面白くなるか、つまらなくなるかの、分かれ目だな。女神に使える身だからこそその楽しみか・・・?)

・・・。。

ここは、カナメラ。

女神の宮殿へと続く道。

そこを馬にまたがった茶髪の少年とその馬の手綱を引く少女が歩いていた。

「玄武様、収穫なしでしたね・・・」

武装した少女Ⅱアゲハが玄武に話しかける。

「え?・・・あ、そだね」

「申し訳ありませんでした。明日こそは必ずやお役にたてるように・・・!」

「うん、頑張って♪期待しってから!」

「はい!!」

玄武の言葉に元気を取り戻したアゲハは うれしそうに振り向いた。ちようどアクビをしていた玄武は、アゲハの頭を掴んで無理やり前を向かす。

「前見てろっ。すっ転ぶぞ」

「す、すみません。」

「んじゃ、宮殿に着いたら起こしてね」

「え？・・・あ、はい。分かりました。」

自由人な玄武はたとえ、そこが馬の背中だろうと居眠りをする。

アゲハもいつもの事だから 普通に気にせず進む。時折、玄武のほうをチラチラ見たり・・・

パチッ

「ほへっ？」

パチパチチ・・・

「何の音・・・？」

アゲハは 立ち止まった。

道の横にある小さな森の中から パチパチと何かがはじけるような音が聞こえてくる。

「沼さんの実験は 今日はないはずですが・・・ナンの音でしょうか？」

首傾げたアゲハ。

「沼さんじゃなかったら、青龍君？でも青龍君はこっちには 配属されてないはずですが」

パチッ！！

「んゝ・・・？」

バチバチッ！！！！

「なんとっ?!!」

急に森の地面が黒くなった。

ドコからか黒い液体が湧きあがり、見る間に森は黒い液で水浸しになる。

「げ、玄武さまー！！」

「んゝ・・・っんだよ、もう着いたのか？」

「チ、違います。アレ見てください！！」

「見ろだと？」

玄武はアゲハが指さす方向を見てみた。

「なっ?!!」

「あ、あの黒いのはいったい何ですか?!!」

アゲハが玄武に聞いたのとほぼ同時にピカッと周りが黒く光った。

「げ、げんむさまー?!!」

「落ち着け、アゲハ！早く俺の後ろに乗れ!!」

「ええ!?!」

「はやく!」

「あ、はい!」

玄武はアゲハの腕を引っ張りあげて後ろに乗せると、思いっきり手綱を引っ張った。

数メートル先も見えなくなりそうなほど強い黒い光の中を馬は走り出した。

「光の割れ目だ！あそこに向かって走れ」

玄武が命令すると、馬は光の割れ目へと全速力で駆けた。

グワツ・・・！？

「「っ！？」」

一瞬の強い揺れを玄武とアゲハが感じとった時、体が宙に浮く感覚を覚えた。

「玄武様！危ない！！」

「ナッ！・・・アゲハ！！」

「っ……ん？」

自分で寝た覚えはないのに玄武が目を覚ました所は、自分の寝床だった。

「ゆ……め？」

夢にしては妙にリアルだった気がするが、重い体を起こしてハンガーにかかっている自分のジャケットをはおる。

まだ何となく頭がボーっとして機能していない事が 玄武には分かったが、部屋の外へと出た。

そのまま いつもの園庭を通り過ぎ 隊長室へと向かう。

「あげは？」

扉を開けながらいつも通り 副隊長アゲハの名まえを呼ぶ。

「……」

静まり返った隊長室。いつもなら ここで 为什么呢！ と、元気よくアゲハが登場↓紅茶を入れさせる↓今日の主な日程……と、いつも通りに進むはずが 今日に限って初っ端からアウト。

「寝坊か？ アンにやろ……」

試しにアゲハの寝床に潜入してやろうと、部屋を出た。

前にも同じような事があって、その時もアゲハの部屋に潜入しアゲハを脅かしてやったっけ？ っ、以前の出来事を思い出して苦笑する玄武。

「今回はどんな ちょっかいを出して脅かしてやろうか」

ん？つと、考えながら歩いて、階段の前に出た時・・・

「あ・・・」

バツタリ出くわしたのは 白虎ひかる光。

「あ、光。ちょうど良いところにいた。アゲハどこにいるか 知って
つか？」

「・・・」

「・・・聞いてんのかよ」

「お前は馬鹿か？」

「は？何が？」

「アゲハは今 集中治療室だ。」

「治療・・・って・・・なんで？」

「・・・まさかだとは思うが、健、お前何も覚えてないのか？」

「な、何が？」

「ま、いい。ついてこい。」

「あ、ちょっと！待てよ、光！！」

階段を下りて行く白虎の後をあわてて追う玄武。

「おい、光。覚えてないってどういうことだよ」

「そのまんまさ。・・・ほら、ここから治療室の様子が見えるぜ」

宮殿の地下1階は 全フロアが治療室となっている。階段を下りた
1階からガラス越しに治療室の様子が見えるようになっていた。
その部屋の隅のほう・・・

「アゲハ・・・っ！！」

「健？」

「痛っつ」

玄武は額を抑えてうずくまってしまった。

「健、大丈夫か？」

「・・・ああ、なんとか」

「なんか、思い出したのかよ？」

「いや、まだ何とも言えね。・・・麒麟はどこだ？」

「麒麟？あいつなら総隊長室だろ」

「お、おい、健。1人で大丈夫かよ」

「何とかなる。」

麒麟の居場所を聞くと、玄武は立ち上がり　また来た道に戻っていく。

白虎はただ玄武の背中を見つめている事しかなかった。

「麒麟と話すんだら、すぐにアゲハのもとに行ってやれよ。アゲハの意識はまだ戻っていいねえが、ずっとお前の名まえ呼んでんだからよ」

「・・・」

玄武は白虎の言葉に一度集中治療室の中を見たが、またすぐに歩き出し階段を上って行く。

「俺よりお前がいたほうがアゲハも安心するだろ？お兄さんよ」

玄武はそういうと、振り返らずに行ってしまった。

「・・・ふん。アゲハがお前に恋心寄せてる事、とっくに分かっているくせに・・・」

白虎は、そのまま玄武とは反対に階段を下りて、集中治療室に入って行った。

階段を上がったところで玄武は壁に背中を預けていた。

「答えられるわけねえだろうが・・・」

それからしばらくして　また玄武は歩き出した。

玄武とアゲハ（後書き）

新キャラ？・・・です。

・白虎Ⅱ光 アゲハの兄貴。アゲハが玄武の部下なのは光のせい♪

あ・・・えっと、なんか前回から暗い？感じですが

玄武君の過去と今のアゲハちゃんは 辛い思いしかない！と思って
います。

意味不明な物語ですみません。

細かいところはご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043x/>

五剣神 ～女神～

2011年12月19日21時50分発行